

ゲーテの「ドイツ帝国」

— 政治の世界と精神の王国 —

渡 邊 直 樹

1. 「神聖ローマ帝国」 ドイツ

「1764年4月3日の戴冠式の日が明けた。」「政治的であると同時に宗教的な式典はかぎりない魅力をもっている。私たちは地上の至尊がその権力のあらゆる象徴に囲まれているのを眼前に見る。しかもそれが天井の至尊の前に跪拝することによって、このふたつのものの協同をまのあたり私たちの耳目に示すのである。というのは、個人でも服従して崇拝することによってのみ、神との親和を実証し得るのである。」⁽¹⁾

ゲーテが戴冠式の町フランクフルトで目撃して『詩と真実』(Dichtung und Wahrheit, 1881-14) に書き留めたこの皇帝戴冠式とは、マリア・テレーシアの長男ヨーゼフ2世のローマ王戴冠式である。ゲーテ13歳の折のことである。ローマ王とは皇位継承者の名称であり、その戴冠式は皇帝戴冠式と表裏をなす公式な儀式である。これがローマ法王の権力とドイツ帝国皇帝との一体化・「神との親和」を実証し、「政治的であると同時に宗教的な儀式」であったことにゲーテは感動した。この盛儀をゲーテが誇らしげに描いたことは、いまだ「ドイツ国民の神聖ローマ帝国」(Das Heilige römische Reich Deutscher Nation) という名称の栄誉に魅了されていたドイツ人意識を垣間見せている。これに先立つ選帝侯会議も含め、約6ヶ月にわたる儀式の準備が慎重に行われた。いかにこの戴冠式がフランクフルトにとって意義あるものであったかがわかる。

しかし、「神聖ローマ帝国」という名称はすでにとうに実体を伴うものではなくなっていた。18世紀半ば過ぎには、その領土はドイツ、オーストリア、チェコ等に限られ、政治支配も帝国とは名ばかりの分裂状態にあった。ヴォルテールはこの「神聖ローマ帝国」の現状を「神聖でもなく、ローマ的でもなく、そもそも帝国ですらない」⁽²⁾ と評した。

ゲーテはこの現実を1806年にはっきりと思い知らされる。つまりこの年「神聖ロー

マ帝国」が正式に消滅したのである。フランス・ナポレオン軍に敗北したドイツ諸領邦は、彼の意のままに帝国解散を受け入れざるを得なかった。最後の皇帝フランツ 2世が1806年8月6日、ウィーン宮廷内で帝国解散勅書「朕は諸般の事情に鑑み、この帝国を解散し、朕自ら帝冠を脱ぐことを決意するものなり」⁽³⁾を読み上げさせる。8月5日レーゲンスブルク帝国議会はこれを正式に承認している。ゲーテは日記に「新聞記事を読んだ。ドイツ帝国が解散した」⁽⁴⁾とだけ記す。ゲーテ57歳の折りのことである。ここには、13歳の子どものとき目撃したローマ皇帝戴冠式への思いもなければ口惜しさのかけらも見られない。ましてや「神聖ローマ」の名すら日記に抜け落ちていいる。帝国の威厳も皇帝の権力も有していない「神聖ローマ帝国」への関心がとうに失せていた。ゲーテはすでに『ウーアファウスト』(Urfaust, 1775)に「神聖ローマ帝国が／余命保つぞ摩訶不思議！」⁽⁵⁾とうたい上げていたのである。

ゲーテにとってドイツ帝国とは単なる名称に過ぎなかった。それゆえに、皇帝戴冠式と帝国解散はドイツ人としてのアイデンティティの問題であり、現実の政治問題ではあり得なかった。ゲーテにとって「ドイツは本来的に憲法をもっていない。ただし国家制度は全体の構成員が相互に活動し合ってこそその名に値するからである。それはむしろ単なる状態—そこにおいて各人が平和時に安らかに過ごすことができる状態で」⁽⁶⁾あった。ヘーゲルはもっとはっきりと『ドイツ憲法論 (Die Verfassung Deutschlands)』で「ドイツはもはや国家ではない。…ドイツのこの国制がいかなる概念のもとに帰属するかについても議論は行われなくなっているが、概念的に把握されないものはもはや存在しないのである」⁽⁷⁾と述べて帝国ドイツが国家ではなく「状態」だと断定した。

翻って、ゲーテの芸術の理想と模範が古典古代にあり、「ドイツ的」芸術の本質をもドイツの過去に追求したことは、ゲーテの芸術的創造活動がこれら両者の関係性の調和の上に成立していたことを明らかにする。それはドイツ国家を前提するのではなく言語文化を共通の基盤として意識したところから生じる文化的国家観であった。

本稿は、ドイツ帝国という「国家」ではなく、すでに「状態」であったドイツの一小公国ヴァイマルの政治に参画したゲーテの国家観を文化的な「ドイツ国民」という概念で捉えなおそうとする試論である。

2 「貴族的なもの」と「宮廷的なもの」

帝国としての実体をもたず分裂していたとはいえドイツ帝国は、絶対的権力を保持した領邦の君主たち、その統治を支える貴族階級、さらにイギリスやフランスほどの力も持つことはなかったが参政の権利をもっていた市民階級、その下の大部分の被支配者層からなるヒエラルヒーを構成する社会であった。1775年27歳でザクセン・ヴァイマル・アイゼナハ公国のカール・アウグストに招聘され、枢密顧問官となったゲーテにとって、こうした社会構造がよほどよく理解できたはずである。彼自身も貴族ではなかったとしてもフランクフルトの名門の生まれであり、むしろこの社会体制を享受できる地位にあった。後年1782年、貴族に列せられフォン・ゲーテとなった彼はエッカーマンにこう語る。「私にとっては全く何でもなかった。われわれフランクフルトの名門では、はじめから貴族同然に思っているから私も辞令を手にしたとき、それは昔からもっているものだとか考えなかった。」⁽⁸⁾ 市長を勤めた祖父、宮中顧問官の肩書きをもつ父をはじめ、ゲーテの家系が一般市民よりも貴族に近いものであったことは、当時の「衣服令」によって古くからの「貴族」と同列に扱われていたことからわかる。

ゲーテ自身のヴァイマル宮廷での体験は、必ずしも心地よいものではなかった。事実、ゲーテの立ち居振る舞いは一部貴族のひんしゅくを買い、彼自身も次第に宮廷儀礼的社交からは遠のく傾向にあった。ちょうどそれは『若きヴェルターの悩み』(Die Leiden des jungen Werthers, 1774)で、「社交界というのは奇妙なところで、どうもあなたがいることがみなさんには不満らしいのです」⁽⁹⁾とヴェルターが茶会から退去を求められたときのようなものである。ゲーテがヴァイマルで直接接する機会が多かったのは社会構成員から見ると王侯貴族である。エッカーマンに「私は十分な人間性と人間的価値に裏打ちされていない、単なる君主の権威にはさして敬意を払っていなかった。」⁽¹⁰⁾「人間そのものの重みがどれほどあるかが問題で、その他は無意味だ。勲章のついた上着や六頭立ての馬車などはせいぜい無知な最低の大衆を威嚇するだけだ。それにしたって怪しいものだ」⁽¹¹⁾などと語り、王侯貴族への批判的見方を隠していない。

しかし、一方で宮廷的貴族的なものに対する尊敬の念も抱いていた。『ヴィルヘルム・マイスターの修行時代』(Wilhelm Meisters Lehrjahre, 1795 - 96)で金持ちの商人の息子ヴィルヘルムは小市民的性格の持ち主である従兄弟のヴェル

ナーへ皮肉を込めた手紙を書く。「ほかの国のことはいざ知らず、ドイツでは普遍的な、あえて言えば人格的自己形成や教養は貴族だけに可能なことなんだ。市民も功績をあげたりなんとか精神を陶冶したりすることができないわけではない。しかし、どんなに気張ってみても人柄とか人品というやつだけはどうにもならない。貴族は身分の高いどんな人とも付き合うので、上品な礼儀作法を身につけることが義務となる。また貴族にはどの家の門戸も閉ざされていないから、その礼儀作法は自由でのびやかなものになる。」⁽¹²⁾ ゲーテの貴族的なもの・宮廷的なものに関する理想と現実の間にはアンヴィヴァレントな性向が認められる。

一方、ゲーテは市民・第三身分の人たちをどう捉えていたのだろうか。農民に対しては彼らへの思いという以前に、土地所有制と貢租制という社会的強制が関心の対象となった。1782年に友人カール・ルートヴィヒ・フォン・クネーベルに宛て、ゲーテはヴァイマルでの体験を踏まえて次のような手紙を書いている。「農民が自分たちだけのために汗して働き大地からそれなりに暮らしていける最小限のものを手に入れるのを見ると、快適な生活といえましょう。…でもご存知のように、バラの枝にアブラムシがついて樹液を吸って太ったら、蟻がやって来てそのろ過済みジュースをいただくでしょう。こういう具合で、今や下の方で一日に調達されるものよりも多くのものが、上の方で一日の間に使い果たされてしまうのです。」⁽¹³⁾ イギリス人ジョージ・バティが農業改革のためにワイマルに招かれ、牧草地の改革に一定の成果をもたらしたとしても、中世以来かわらぬ領主制のもとにあり、領主に対して一定の貢租など封建的負担を負う農民と農業の実態をゲーテの観察眼は見逃してはいない。ゲーテはワイマルでの農業生産というよりも、領主支配体制そのものをいわば社会構造上の欠陥として捉えていた。

この解決法は、例えば『ヴィルヘルム・マイスターの修行時代』に見て取れる。この作品の登場人物・貴族ロターリオの農業批判にはヴァイマルとドイツ全体の状況が映し出されていると考えてよい。アメリカ独立戦争にも参加したロターリオは語る。「税負担が貴族にではなく、農民にだけ課せられている……国家が適正で合法的な税を取ることにして、封建的領主制などというまやかしを廃止し、その代わり自分の土地は自分のすきなように処分することを許してくれるなら、私たちもこんなに土地を所有することもないし、子どもたちにもっと平等に土地を分けてやることもできる。」⁽¹⁴⁾

社会構造という観点から農民と貴族との対立関係と、貴族の農民への同情が掲げられている。支配階級としての貴族は改革を提案する側として、被支配階級としての農民は社会的抵抗力をもたない側として、主体性をもたない階層として描かれている。王侯・貴族の宮廷的伝統はドイツ的文化・芸術を担う対象として、一方農民は社会的考察対象とされている。ここには文化と社会との間の無意識的ともいえる断絶がある。

ゲーテがいう貴族的なもの、宮廷的なものとはノルベルト・エリアスが『宮廷社会』(Die höfische Gesellschaft, 1981)で述べているように「平静さ、情感の抑制、落ち着き、思慮深さ、とりわけ宮廷人を他の多くのものから際立たせる荘重さ」⁽¹⁵⁾であるとすれば、これが生得的伝統的ともいえる家庭環境によって育まれるもので教育により後天的に獲得することが困難なものであることがわかる。そして、この当時のドイツ宮廷社会が模範としたのはフランスであった。フランス語とフランス的儀礼こそが、ドイツ諸邦の宮廷にとっても身につけるべき模範であった。しかし、人間の性格に関して生得的なものが後天的なものに優るとゲーテがいうならば、ドイツとフランスあるいはイギリスとの比較においてそれぞれ民族的違いをもって思想的・道徳的・芸術的違いと捉えられる。従って、ここでは「違い」があってもその優劣が論じられることにはならないであろう。この意味で、ゲーテのドイツの固有性・独自性の理念が普遍性を前提としてその上に確立されるべき性格のものであることがわかる。

ゲーテがディドロの美学や演劇論をドイツに積極的に紹介したことは、ドイツ固有の芸術創生への強い意志があった。この姿勢は確かにフランスを模範としたものではあるが、理想とするものではなかった。ドイツの歴史家クルト・フォン・ラウマーは『1800年前後のドイツ』(1965)で、たとえばフランス革命の衝撃がドイツを眠りから目覚めさせたという通説を批判している。すでに1789年の革命の何十年も前から目覚めた青年や未来志向の同時代人がいたというのである。そして、ゲーテのシュトラースブルク時代を引き合いに出している。つまり、「若いドイツ」と模範である「老成したフランス」という対照によってこのゲーテ時代の精神を描き出している⁽¹⁶⁾。

3 ゲーテのフランス

ゲーテのシュトラースブルク滞在時期は1770年4月から71年8月までである。昔からの「神聖ローマ帝国」に属したアルザスと帝国都市シュトラースブルクは、この当時政治的地理的にはフランスの領土であった。しかし、フランス絶対主義がその支配を徹底して押し進めたのではなく、比較的自由的な雰囲気が漂う、むしろドイツ的基盤の上にフランス文化を享受できる都市であった。ドイツの教養人がフランス語とフランス的風習を学ぶ好適地であったという意味で、ゲーテもここで法学の学位とフランス的教養を身につけることを求められた。「エルザスはフランスに併合されてからまだあまり年月がたっていなかったため、老若を問わず、すべての人々に在来の制度、習俗、言語、服装に対する深い愛着が残っていた。被征服者はやむを得ず自己の生存の半分を失うとしても、残りの半分以上を自発的に放棄するのは恥辱だと考えるものだ」⁽¹⁷⁾と『詩と真実』に記している。学生の大部分はドイツ人学生であったことから、シュトラースブルクのこうした雰囲気が見て取れる。

しかし、ここにやって来たゲーテははからずも目的とは違ったところに、むしろフランス的な洗練や文化をよしとするのではなく、それとの比較においてドイツ的なものを再認識あるいは創生するゲーテ本来の性向が目覚める。「私はこの土地で自分の希望とは全く正反対のことを経験し、フランスやフランスの習俗に向かわせられるよりはむしろ、これに背を向けることになってしまった。」その理由はといえば「フランスの文学は、それ自体に努力する青年を魅了するよりは、むしろ反感をいだかせるに違いないようなある種の性質を帯びている。すなわち、フランス文学は老成して高貴ではあったが、この二つの性質によって生の享樂と自由を求める青年たちを喜ばせることはできない。」このようにしてゲーテは「フランスの国境にありながら、全てのフランス的特性を一挙に放棄して」生の享樂と自由とにドイツの時代精神を認識した⁽¹⁸⁾。

帝国がほとんど機能しない状態の時代にあってもむしろ、ドイツ社会と人間は生き生きとしていた。それは統一国家でなかったがゆえに各領邦の地域性をもつ独自の雰囲気によった。それぞれの領邦はいわばフランス中央集権国家の社会的縮図であったが、文化的にみれば人々に学問や科学や芸術を享受させる多くの機会

を提供するものであった。ゲーテは、この事情がドイツに有利だと考えていたことをエッカーマンが伝えている。「帝国全体に20の大学があること、非常に多くの公共図書館や美術館が存在すること、国民の教養を担い促進する多くの劇場があること…それらの都市が万一自分の主権を失い、地方都市として何らかの形で大ドイツ帝国に組み込まれれば、その姿は持続するだろうか。私はそれを疑問視している。⁽¹⁹⁾」

ゲーテがシュトラースブルクに勉学の志をもってやって来た折、ゲーテよりも5歳年長の文芸評論家、ヨーハン・ゴットフリート・ヘルダーもまた眼病治療のためにシュトラースブルクに滞在していた。二人の出会いは「私にとって重大な結果をともしうことになった特筆すべき事件⁽²⁰⁾」となった。ヘルダーは民族の歴史文化を重視し、ドイツ文化の固有性・独自性に注目していた。「ドイツ人はレバノンの杉、ギリシアの葡萄、ローマの月桂冠を求めようとするのではなく、自国の聖なる森の野生のりんごを味わうべきである。⁽²¹⁾」つまり、ヘルダーはヨーハン・ゲオルク・ハーマンから継承した「詩は人類の母語である」という考えを理念として抽象化した「民謡」・（フォルクスリート）に、ドイツ文化の始原を見ようとした。はるか昔の諸民族の美德や幸福について、ただ一般的な学校概念で判断を下そうとする今世紀の流行を批判し、民族文化の源を民族の幼年時代に求め、その発展として文化の独自性を強調した。それゆえに各民族とその文化には模倣不可能な固有性が確保されると説く。

このヘルダーの思想がゲーテに与えた影響は、『ドイツの建築芸術について』（Von deutscher Baukunst, 1773）と『シェイクスピアの日に』（Zum Shakespeares Tag, 1771）に実を結んだ。エルヴィン・フォン・シュタインバハの手になるシュトラースブルク大聖堂は、ゲーテにゴシックというネガティブに解釈されていた美学的概念の再考を促す。「私が始めて大聖堂へ行ったとき。私の頭はよき趣味についての通念でいっぱいになっていた。聞き覚えで質量の調和とか形式の純粹さとかあがめていたからゴシック装飾の勝手気儘な乱雑ぶりを許しがたいものと思っていた。ゴシックという見出しの下に、私は曖昧、無秩序、不自然、ごたませ、つぎはぎ、過度の装飾などおよそ頭のなかをその種の曲解でいっぱいにしていた。」これが今度は全く反対に認識される。「それは完全で偉大な印象で私はいっぱいになった。それは調和のとれた無数の部分から成り立ってい

だから、味わって喜びは感じて、認識したり説明したりはできない。」そして、「これこそがドイツの建築芸術だ。われわれが建築芸術だと高らかに宣言できることを神に感謝する。」そして、フランス的芸術概念である「軟弱な美的教養」や「無意味ななめらかさ」と対置され、ドイツ的「個性的芸術こそが唯一の真の芸術である」と宣言される。ここにおいて、良き趣味の反対概念であったゴシックは調和のとれた個性的独創的芸術となる。「認識したり説明したり」できないところがドイツ固有の文化であり、これは歴史的伝統的に形成されてきたものである⁽²²⁾。

この思想を社会にあてはめてみるとフランス的宮廷趣味あるいは貴族趣味は普遍的ではなく、フランスという風土を土台にした固有の文化・趣味であり、ドイツ宮廷・貴族はフランス的教養を追い求めるのではなく、むしろ調和のとれた、「ゴシック的」ではない完全で偉大な「ドイツ的」文化に目覚めるべきだという。これはドイツ宮廷社会への間接的批判でもある。「ドイツ的」なものへの視点は、自ずとドイツの歴史への回帰を促す。しかし、神聖ローマ帝国のドイツではなく、各都市に根ざしたそれに注目したところにゲーテの独創があった。

シュトラースブルクは、フランスの支配下に入ることにより、歴史的ドイツ文化に新たにフランス文化のヴェールが被さり始めたという状況にあった。ゲーテはこの町を融合の歴史とは見ずに、フランス的なものとドイツ的なものが幾重にも重層構造をなして発展してきた都市と見た。

ナポレオンによってドイツが蹂躪され、多くの若者がナポレオン支配への敵意をもって立ち上がったときもゲーテの抱いたフランスへの敬意は変わらなかった。しかし、それは基本的には文化共同体としてのフランスへの連帯意識でありドイツ民族の文化的固有性を否定するものではなかった。「憎しみが湧きもしないのにどうして武器がとれよう。私はフランス人を憎んではいなかった。…地上でもっとも文化が進んだ国の一つであり、私自身の教養の大部分がそのお陰をこうむっている国民をどうして憎めよう」⁽²³⁾と語る。国民的憎悪を前にした現実と普遍的文化を顧慮しての伝統的芸術とを分けて考えたいゲーテにとって、戦争とは文化的ドイツを脅かすところにある。事実、ゲーテは自分自身が「自由とか民族とか祖国などという大思想に対して冷淡であろうと」思われている風評を気にかけて自分の信念をハインリヒ・ルーデンに告白する。「私にとってもドイツは大事なものだ。個々の点では尊敬すべきものを持ちながら全体としてはこのようにみじめなドイツ民族のこと

を考えると、身を切られるような思いをすることがよくある。…何とかしてこれを切り抜けようと私は努力している。その結果学問と芸術において、これをはばたいて飛びぬけることのできる翼を見つけたのだ。なぜなら学問と芸術は世界に属するものであり、その前にあっては民族性という限界は消滅してしまうからだ。⁽²⁴⁾」こうした内的葛藤を経てゲーテは、狭い民族的自尊心を超えた世界市民的意識をもって世界にはたらきかける文学の創造に寄与するという思想へと到達する。

このことは、ゲーテのドイツが政治的意味でのドイツ国家ではなく、文化芸術的意味でのドイツ国民を志向していたことを示すものである。

4 ゲーテの芸術観と現実世界

ゲーテの芸術論はロマン派との関係からそのもつ特質が明らかになる。ゲーテは古典古代を理想として、それを過去の事実・所与の産物として現代の模範とした。つまり、古典古代の芸術の普遍精神と統一性の存在を認めようとした。ノヴァーリスは、ゲーテがこの意味で様式ということを重視してその本質をいかに思い描いたかについて、次のように分析する。「(ゲーテ流の考え方によれば) 古典古代の芸術作品は別世界の生まれであり、それはまるで天から降りてきたようなものなのである。」⁽²⁵⁾ 一方、ロマン派の芸術論には、美という概念そのものがなく、規則も基準も存在しない。換言すれば、規則をもたないというよりも基準をもたない。ロマン主義者たちは芸術という理想を把握することがなかった。ロマン派にとってのそれは現存しているというよりも、むしろその精神を研究することによって生み出されるべきであり、こうした行為によって古典的芸術が成立する。古代の産物でもあり、未来の産物でもある。従って、古典古代の芸術作品に統一性を見ようとしなない。ゲーテにおける純粋な内容の統一性に対して、フリードリヒ・シュレーゲルに象徴されるそれは「厳密に純粋な古典的詩作のあり方などというものはすべて今やとるに足らないものだ。」⁽²⁶⁾

ここで問題となるのは芸術の理念と芸術の理想との関係である。ゲーテは芸術形式を様式で分類した。ゲーテは歴史的に規定され、類型化できる形に注目した。造詣芸術の領域では古代ギリシアが模範であり基準となり、美を根拠づけるのである。そして、ゲーテにおける形は美を根拠づける基準であり、それは内容に現れている。

ゲーテはこの芸術的理想の純粋な内容を原像と呼ぶ。そして、この原像に到達できないものの、出来るだけそれに「似ている」ことが芸術的創作なのである。この類似性が古代ギリシアの諸作品に最も確実に完成されて現れていると見た。

芸術活動は、創造的生成のなかに現れるのではない。すでに芸術の原像は創造された作品よりもア・プリオリに存在している。それは創造ではなくて自然である。これがゲーテ固有の自然主義である。自然を把握することによって理念が獲得され、この理念を芸術に適するように純粋にすることがゲーテが追求したテーゼであった。従って、個別作品は芸術的理想に対しては創造されたものではなく、偶然的なものとなり理念である。それは原像を表現しようとする一形式であり、模範としてのみ存在しうる。シュレーゲルはこれを次ぎのように解釈する。「純粋な法則などというものは空虚なものである。この法則が満たされるためには…なんらかのきわめて高次の美的原像が必要であり」、「この原像の法則性を我が物としようとする者…の行為には模倣という言葉だけが合致する。」⁽²⁷⁾

一方、シュレーゲルにとって芸術作品は一形式であってはならず、超越的で生きて変化し移ろい行く要素をもたなければならない。ロマン主義者たちは芸術作品のもつ法則性を絶対的法則性としようとした。偶然的なものも法則的なものにかえられなければならない。この意味で、ゲーテが古代ギリシアの芸術を自立しそれ自身のうちに完結した規範的模範的なものと見たことに反対した。ノヴァーリスはこのことを明確に意識していた。「古典古代の作品が所与のものとして存在しているなどと信じるなら、それは大変な思い違いをしている。今初めて古典古代が成立しはじめるのである…それはわれわれによって初めて生み出されるべきものなのだ。」⁽²⁸⁾ およそロマン派とは正反対の古典古代に模範と理想を求めるゲーテの完結的芸術観は、時代のドイツの国家国民の文化創造という観点からは形をもっていた。一方、ゲーテの政治的現実に対する逃避的態度、すなわちナポレオンに対する戦いやフランス文化への捨て難い敬意が意味するものは、規範と理想とを歴史のうちに求めることができないジレンマの反映であり、このことは取りもなおさずゲーテの思想のうちに帝国ドイツはなくすでに「状態」であったことをまた明らかにする。

5 むすび

ドイツとはどこにあるのか、私はその国を見出すことはできない

教養あるドイツが始まるところ、政治的ドイツは終わるのだ (95)

ドイツ人よ、君たちは国民になろうと望んでいるけれど、無駄なことだ

そんなことではなく、自分よりも自由に、人間に形成しなさい (96)⁽²⁹⁾

ゲーテとシラーの『クセーニエン』(Xenien 1796)のこれら詩句が、事実ドイツ帝国と国民文化の現状と将来を暗示している。しかし、これは風刺ではなく国民文化の精神に重きを置く真正なるドイツの時代精神を映し出していた。

ゲーテの精神にある貴族的宮廷的フランス文化への憧憬とドイツ的民族固有の芸術文化への洞察という一見アンヴィヴァレントな感情、これら両者を調和させる古典古代芸術の研究にゲーテと時代との接点を見てとることができる。この時代精神は統一的に把握できるものではもちろんない。ゲーテはギリシア古典を規範・理想とすることによって自己のうちに完結的芸術の完成を目指した。一方、フリードリヒ・シュレーゲルやノヴァーリスらロマン派のそれは、ゲーテとは正反対に生成し形を変えて永遠に展開し続ける芸術であった。

政治家ゲーテがナポレオンとフランスに対して生涯敬意を抱き続け、フランスとの戦争に反対したことは、国家というよりも文化的国民意識が優っていたことを示している。一方、ロマン派はドイツ国家と祖国愛に目覚め、ドイツの民族意識を土台とした国家的統一を優先する。

ゲーテとロマン派との間の芸術観に認められる違いは、そのままドイツ国家とドイツ国民という概念にもあてはめることができる。それはドイツ国家を意識的に直視せず人間形成という自己完結的精神のなかでドイツの「状態」を認識する精神と、政治的現実を自己体験として認識し、国家のなかで有機的发展を遂げようとする人間精神との対立という形に表れている。このことはドイツの近代国家とドイツ人の近代精神の間に大きな乖離をもたらすことになる。

注

- (1) Johann Wolfgang Goethe: Sämtliche Werke nach Epochen seines Schaffens Münchner Ausgabe. Hrsg. v. Karl Richter in Zusammenarbeit mit Herbert G. Göpfert, Norbert Miller und Gerhard Sauder. München 1986, 16 Bd., S.217. (以下 Goethe と略記)
- (2) 菊池良生『神聖ローマ帝国』(講談社現代新書)、12頁。
- (3) 同上書、15頁。
- (4) Goethes Leben von Tag zu Tag. München 1986. Bd., IV, S.718.
- (5) Goethe, 1-2, S.146.
- (6) Goethe, Weimarer Ausgabe I, 27, S.389.
- (7) ヘーゲル「政治論文集」(上) 金子武蔵訳 岩波文庫 昭和42年、49頁。
- (8) Goethe, 19 Bd., S.582.
- (9) W.H.ブリュフォード『18世紀のドイツ・ゲーテ時代の社会的背景』上西川原章訳、1980、295頁。
- (10) Goethe, 19 Bd., S.582.
- (11) Goethe, 19 Bd., S.629f.
- (12) Goethe, 5. Bd., S.289.
- (13) Goethes, Weimarer Ausgabe IV, 5, S.312f.
- (14) Goethe, 5. Bd., S.509.
- (15) ノルベルト・エリアス『宮廷社会』波田節夫・吉田正勝訳(法政大学出版局)、1981。
- (16) 坂井栄八郎『ゲーテとその時代』(朝日選書) 1996、58 - 59頁。
- (17) Goethe, 16 Bd., S.514.
- (18) Goethe, 16 Bd., S.512.
- (19) Goethe, 1-2 Bd., S.253f.
- (20) Goethe, 16 Bd., S.433f.
- (21) マイネッケ『歴史主義の成立』菊盛英夫・麻生建訳(筑摩書店) 1968、90頁。
およびヘルダー『人間性形成のための歴史哲学異説』小栗浩・七字慶紀訳
(中央公論社・世界の名著38) 参照。
- (22) Goethe, 1-2 Bd., S.418f.
- (23) Goethe, 19 Bd., S.

- ②4 『ゲーテとともにⅠ』 ビーダーマン編 大野俊一訳（角川書店）昭和23年、257～8頁。
- ②5 ヴァルター・ベンヤミン『ドイツ・ロマン主義における芸術批評の概念』 浅井健二郎訳（ちくま学芸文庫）2001年、260頁。
- ②6 Fr. シュレーゲル『ロマン派文学論』 山本定祐訳（富山房百科文庫）昭和53年、60頁。
- ②7 ヴァルター・ベンヤミン前掲書、251頁。
- ②8 同上書、255頁。
- ②9 W.H.ブリュフォード、前掲書、297頁。

(2004年1月)